

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第186次)

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、回廊で囲まれた東西約120m、南北約170mの区画です。回廊内側(内庭)の中央には、儀式の際に天皇が出御する大極殿があり、その南方には南門が設けられています。一部の建物については、戦前に日本古文化研究所が発掘調査を実施していますが、奈良文化財研究所でも継続的に調査をおこない、主要な建物の配置と構造をあきらかにしてきました。

今回の調査地は、大極殿院内庭の中央部南側、大極殿の前面にあたります。これまでの調査で、大極殿院内庭も朝堂院朝庭と同じく礫を敷いて整備されていることがわかっており、また、その下層には藤原宮の造営に関わる遺構、上層には藤原宮廃絶後の遺構が存在することが知られています。

今回検出した藤原宮期の遺構には、礫敷広場、大極殿南面階段があります。

礫敷広場は、拳大の礫を整地土の上に敷いたもので、今回の調査区では概ね標高71.2m前後で検出されていますが、北東側がやや低いことがわかりました。

大極殿南面階段では、中央階段と東階段の痕跡を確認しました。凝灰岩切石の底部がみつき、その幅は1.1mあります。階段の東西幅は中央階段で

5.2m、階段の出にあたる南北の長さはいずれも3m以上あります。階段の凝灰岩はいずれも二上山産出のものです。階段の周囲からは兵庫県加古川西岸産出の溶結凝灰岩(竜山石)^{ようけつきょうかいがん}も出土しており、基壇の外装石として両者を組み合わせて使用していたものと考えられます。

藤原宮造営期の遺構としては、南北溝とそこから分かれる斜行溝のほか、資材運搬に用いられたと考えられる運河を確認しました。斜行溝は、南北溝と同時併存することが判明したうえに、運河を埋め立てた後の窪地と同時に埋められていることがわかりました。窪地の埋め立てに際しては、最終的に異なる土を交互に積み重ねて丁寧に整地がなされています。

藤原宮廃絶後の遺構としては、奈良時代から平安時代までの掘立柱建物を6棟とそれとともなう堀、耕作にともなう小溝群を確認しました。掘立柱建物の時期は多時期にわたっており、何度も建て替えられていることがわかりました。大極殿院や朝堂院で多数見つかっている、奈良時代以降の建物と関係するものと思われます。また素掘りの小溝群との重複関係から、建物の造営と耕地化が繰り返されていたこともわかりました。

以上のように、藤原宮造営期、藤原宮期、藤原宮廃絶後の土地利用の過程を知る重要な手がかりが得られました。(都城発掘調査部 清野 陽一)



発掘調査区全景(南東から、右奥の森が大極殿基壇)



大極殿南面東階段と竜山石の残片(北東から)